

マドンナの宝石 / サヴァリッシュ  
バイエルン国立歌劇場管弦楽団



**DAMPC**  
STEREO DOCD-0012-13



## 創立30周年記念盤

### ごあいさつ

DAM会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申しあげます。弊社はお陰を待ちまして、本年11月、創立30周年を迎えることとなりました。30年間の長きに亘る皆様のご愛顧に、社員一同、心より御礼申しあげます。ここにお届け致しますDAMオリジナル・ディスクは創立30周年の感謝を込めて制作致しました記念盤でございます。既に、アナログ・ディスク、コンパクト・ディスクを合わせ、150タイトルを越えるソフトを制作し、毎回、会員の皆様を始め、業界各方面でも、そのクオリティの高さで注目を集めていますが、この創立30周年記念盤は、いわばこうしたソフトの集大成であり、さらに皆様にお喜びいただけるソフト作りの新たな一歩となるものであります。この一枚をご家族の皆様で心行くまでお楽しみ戴ければ幸いです。

さて、弊社は創業以来、特にオーディオ、ビジュアル分野に積極的に取組み、単にAV機器の販売に止まらず、AVを豊かにお楽しみいただくための様々な催しをご提供して参りました。有名アーティストを招いての生録音会、コンサートへのご招待、数々のAVセミナーなど、その時々話題性や、新技術を逸早く検証する進取の気風に富んだ企画により、皆様のご支持を得て回を重ねております。弊社はこれからも、AVのハードウェアとソフトウェアは不可分のものとの考えで、諸政策を実施してまいる所存です。その一環として昨秋よりAVソフト宅配システム「そふとつきゅう」を始めました。創立30周年を機に、今後も今まで以上に時代を尖鋭にとらえ、新たな試み、新たな企画により、皆様のAVライフにご奉仕して参ります。変わらぬご支援、お引立てよろしくお願い申しあげます。

# マドンナの宝石

## サヴァリッシュ

バイエルン国立歌劇場管弦楽団

### DISC 1

- ① 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲  
(グリカ曲) ..... 5'19"
- ② 中央アジアの高原にて(ボロディン曲) ..... 7'21"
- ③ 文響詩「禿山の一夜」(ムソルグスキー曲) 10'50"
- 組曲「道化師」作品26 (カバレフスキー曲)
- ④ プロローグ ..... 0'58"
- ⑤ ギャロップ ..... 1'29"
- ⑥ 行進曲 ..... 1'08"
- ⑦ ワルツ ..... 1'12"
- ⑧ パントマイム ..... 1'41"
- ⑨ 間奏曲 ..... 0'50"
- ⑩ 叙情的なシーン ..... 1'15"
- ⑪ ガヴォット ..... 1'34"
- ⑫ スケルツォ ..... 1'38"
- ⑬ エピローグ ..... 1'56"
- 「三つのオレンジへの恋」作品33より  
(プロコフィエフ曲) 13'41"
- ⑭ 行進曲 ..... 1'34"
- ⑮ スケルツォ ..... 2'24"

### スペイン奇想曲作品34

(リムスキー=ニコルサコフ曲)

- ⑫ アルボラダ ..... 1'14"
- ⑬ 変奏曲 ..... 4'27"
- ⑭ アルボラダ ..... 1'18"
- ⑮ シェーナとジブシーの歌 ..... 5'09"
- ⑯ アストゥリアのファンダンゴ ..... 3'23"
- W/ルイス・ミハル(ヴァイオリン・ソロ) ~ ⑫, ⑬, ⑮, ⑯

### DISC 2

- ① 喜歌劇「軽騎兵」序曲 (スッペ曲) ..... 6'43"
- ② 歌劇「ザンバ」序曲 (エロール曲) ..... 7'42"
- ③ 歌劇「売られた花嫁」序曲 (スメタナ曲) ..... 6'29"
- ④ 喜歌劇「詩人と農夫」序曲 (スッペ曲) ..... 9'21"
- ⑤ 喜歌劇「天国と地獄」序曲  
(オッフエンバック曲) ..... 9'24"
- ⑥ 歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲  
(ヴォルフ=フェラーリ曲) ..... 3'52"
- ⑦ 劇的物語「ファウストのごうん」より「ラコッツィ行進曲」作品24  
(ベルリオーズ曲) ..... 4'29"
- ⑧ 狂詩曲「スペイン」 (シャブリエ曲) ..... 6'27"

W/ペーター・ヴェブケ(チェロ・ソロ) ~ ④

W/ルイス・ミハル(ヴァイオリン・ソロ) ~ ⑤

## 純粹な音楽の道を歩みつづけて、頂点で活躍を続けるマエストロ。

—— 真鍋圭子



テレビ、ラジオを通して日本全国津々浦々、その名と顔を一番良く知られている指揮者は何といてもヴォルフガング・サヴァリッシュであろう。それもそのはず、彼は1964年の東京オリンピックの年に初来日して以来、67年からは毎年NHK交響楽団を指揮するために、もう20年以上、一年たりとも欠かすことなく日本を訪問しているからである。またこの間、ウィーン交響楽団とスイス・ロマン管弦楽団を率いて来日、名演奏の数々を聴かせてくれている。

1950年代の初めから、サヴァリッシュはカラヤンの次の世代を担う若きドイツ音楽界のホープとして、輝かしいスター街道を走り始めていた。1953年、30才を迎えるまでに、ベルリン・フィル、ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭へのデビューを飾り、彼の名は一躍ヨーロッパ音楽界の話題を総ざらいしてしまったのである。カラヤンのレコーディング・プロデューサーとして名高いワルター・レグが即座にサヴァリッシュをロンドンに招き、翌年からはフィルハーモニア管弦楽団とレコーディングを始めている。

日本に初来日した頃のサヴァリッシュは、ヨーロッパの主要都市、主要オーケストラ、主要劇場を制覇しつつきた、まさに破竹の勢いの若きマエストロであった。ところが、サヴァリッシュの音楽観、人生観、性格は、すでにこのような音楽産業やマスコ

ミの喧噪に一線を画し始めていた。極めて繊細な神経の持主で、謙虚でシャイなこの人は自分の意志なくマネージャーの思惑によって動かされたり、音楽産業の意図によりレパトリーを決定させられたりするごとに嫌気を覚えたのだろう。ある時からサヴァリッシュは、これ等の世界に明らかに背を向けて一人歩きをするようになった。若くして頂点をきわめ尽くしてしまった人だからこそできる、“going my way”の精神である。そしてその“道”とは、雑念のない純粋な音楽の道であった。

5才の頃からピアノを始め、音楽学校に入るまでに音楽理論、作曲をすべて個人レッスンで学んでいたサヴァリッシュは、戦後ミュンヘンの高等音楽学校に入学し、わずか一学期で卒業試験にパスしてしまう。すぐに隣町のアウグスブルクのオペラハウスに就職したが、当時のミュンヘンの“新音楽”というサークルで、戦前は演奏することが許可されていなかったフランス音楽やロシア音楽の譜面を山のよう積み上げて夜びいて演奏し続けたとのこと。とにかく、この人は音楽することが職業というより、趣味なのである。サヴァリッシュのピアノは、それだけでファン層がある程だが、彼はピアニストになろうと思ったことはなかったとのこと。この分野もただだ彼の音楽することの一部なのである。

彼がピアノを練習しているのを聞いたことがないと、彼を16才の時から知っている夫人が言う。仕事

が大変な時、リラックスするためにピアノを弾き、ピアノを弾き終るとどんなストレスも解消して、また上機嫌になるのだという。サヴァリッシュは現在、バイエルン国立歌劇場の総監督の地位にある。バイエルン州の主都ミュンヘンにあるナショナル劇場とその隣にある旧レジデンス劇場、その裏手にあるマールシュタール実験劇場の三つの劇場の公演の総責任者であり、1,300人の従業員をかかえる地方自治体の一組織の運営責任者なのである。さらに、指揮者として音楽総監督の任務も兼任しているから、その多忙さは想像を絶する。

サヴァリッシュのミュンヘンでの毎日は、朝9時ぴったりに彼の劇場の執務室で始まる。会社の社長と同じく、机の上に積み上げられた書類に目を通し、



スタッフとのミーティング風景

サインをする。控室は病院の待ち合い室のように、彼と話す機会を待っている人達であふれている。10時からは、音楽練習のある時は1時まで練習、1時からは新しい歌手のオーディション。これが無い時は続いて事務仕事。食事に帰宅、とんぼ帰りでまた劇場、そして仕事の続き。夜に彼が指揮をする時だけは、午後を休養と準備の時間としている。1971年からバイエルン国立歌劇場の音楽総監督を引き受けているが、それにプラスして今の『オペラ・ディレクター』の責を担ってからはや7年余り。こんな超人的ハードスケジュールをこなしているサヴァリッシュを内から支えているのは、自分の生れ故郷ミュンヘンのこの劇場、自分が子供の頃両親に連れられて来て指揮者になることを決めたこの劇場への愛情に他ならない。世界中の名だたる劇場で指揮してきた経験から、この劇場がそれ等より勝るとも劣るとは思われない。こんなに素晴らしい劇場で音楽できるチャンスがあるのに、何故彼が指揮しなければならぬのか、というのが彼の持論。

現在のバイエルン国立歌劇場は、サヴァリッシュのこれだけの愛情の成果が着実に実を結び、この劇場の歴史の中でも一大黄金時代を生み出している。18年間に渡る彼の指導のもとで、オーケストラは今やベストの状態にある。

これ程多忙のサヴァリッシュが世界の名だたるオーケストラからの招きを断り、毎年日本のために5



週間もの時間を作っているのは世界の音楽界の七不思議だという。理由はただ一つ、自分の劇場を愛しているのと同様、彼は日本と、日本人とNHK交響楽団を愛しているのだ。レコーディング嫌いのサヴァリッシュが今回の録音を引き受けてくれたのも、これが日本の会社からの申し出だったからだと思う。レパートリーも、彼とこのオーケストラにとっては珍しいものだが、自分達の『音楽的遠足』と名付けて、セッションには念には念を入れ、自分達に十分納得のいくまで、脱帽する程丁寧に真剣に真面目に録音していた。録音完了後、サヴァリッシュは一言、「いい録音になったと思いますよ。」この自分に厳しい人が自らこんなことを言うのは始めてだとは、トーン・マイスターの弁。歴史的な名盤が誕生したようである。

# 演奏する喜びがあふれるほどに伝わってくる、そんなオーケストラ。

—— 真鍋圭子

ミュンヘンの宮廷楽団を前身とするこのバイエルン国立歌劇場管弦楽団は、現存するオーケストラ中最古のものである。ウィーンやドレスデンの宮廷楽団よりずっと早く組織され、1530年以來の団員の全

メンバー表が今に至るまでずっと残っている。ヨーロッパ中を旅行して歩いたモーツァルトが、このオーケストラに接して感嘆したことも、父親への手紙に書かれている。彼がこの劇場、この管弦楽団用に

リハーサル風景



作曲した名作「イドメネオ」は、オーケストラ・パートが難しく、当時の他の劇場では演奏できなかったという。ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」もこの劇場で初演されたが、やはりこのオーケストラの実力があってこそ初演可能となったのである。

宮廷指揮者としてここに就職することを熱望したモーツァルト。国王ルードヴィッヒII世の熱烈な擁護のもとに4作品をここで初演できたワーグナー。ミュンヘン生れでこの劇場の常任指揮者を二度務めたりヒヤルト・シュトラウス。この三人の作曲家の音楽の伝統は、このオーケストラの中で世代から世代へと受け継がれて今に至っている。

ブルーノ・ワルター、R・シュトラウス、カール・ベーム、H・クナッパーツブッシュ、クレメンス・クラウス、ヨーゼフ・カイルベルト等の音楽総監督の後をついで、1971年以来ヴォルフガング・サヴァリッシュがこの伝統の継承に全身全霊を捧げている。

この管弦楽団はウィーン・フィルと同じく国立歌劇場付の楽団ではあるが、独立したコンサート・シリーズを持っていて、コンサート・オーケストラとしての活躍も目ざましい。二年前にカルロス・クライバーとの演奏旅行で日本でもおなじみである。サヴァリッシュが音楽監督になって以来、その水準は着実に高くなっていて、今やオペラのオーケストラとしてはウィーンと並び称される実力を持っている。ミュンヘンにオーケストラは4つあるが、このバイ

エルン国立歌劇場管弦楽団の特徴はその音楽監督の影響からか、いつも安定しているということ。そして、バレエでも現代曲でもいいかげんな演奏、手をぬいた演奏をしないということである。他のオーケストラに比べて演奏回数が比較にならない程多いにもかかわらず、このオーケストラの団員は、いつも演奏に対する喜びを持っているのが客席に如実に伝わってくる。これが、このオーケストラの最大の魅力である。

このレコードの曲目は、彼等にとって耳慣れている音楽とはいえ、演奏するのは初めてのものばかり。細部の小さな不揃いまでサヴァリッシュに厳しく指摘されるので、一同緊張に次ぎ緊張。ブルックナーやブラームスの交響曲の録音の数倍も集中力を必要としたという。その結果、この録音は比較的地味な活動をしているこの管弦楽団の、ブリリアントな実力を示す素晴らしい名刺となることだろう。

ヘラクレスザール外観



ほとんどが初めて指揮をした曲でしたが、かなり良い録音が出来たと思います。

—— インタビュアー：真鍋圭子

(M)：真鍋圭子

(S)：ヴォルフガング・サヴァリッシュ

～(M)：レコーディング本当に有り難うございました。初めて指揮をなさった曲もきっと多かった事と思いますが。

～(S)：はい、殆どが初めて指揮をした曲目で、最初の出会いにもかかわらずかなり良い録音が出来たかと思えます。

～(M)：御自身も少しは楽しまれましたか？

～(S)：勿論楽しいですよ。オペラのレパートリーとも、通常のコンサートの曲目とも全く違いますし、最高の水準でレコーディングされたこの種の名曲集

には、オペラやコンサートで出会うことは今までではありませんでした。それだけに、なおさら緊張感や喜びがあり、これらのレパートリーにかえて先入観なしに取り組めたと思います。さらには、私達には全く新しい、凝縮された世界であり、それを描写できるので、やはり楽しいですね。

～(M)：マエストロは今回の録音の準備のために、かなり時間をかけられたのではありませんか？

～(S)：それはどういう意味ですか？

～(M)：例えば、総譜に目を通すとか。

～(S)：それは勿論必要です。オペラと通常のコンサートのレパートリーから外れるので、私にとって



は80%は初めての曲でした。ただし、これらの曲目は何処かで知っているというか、何かの機会に聞いたことのあるもので、総譜に相對するのは初めてですが、それは又やらねばならない事ですから。

～(M)：という事は、ドイツでも時々これらの曲を耳にする訳ですか？ 日常生活の中で何となくと言っておられましたか？

～(S)：「天国と地獄」や「売られた花嫁」の序曲、特に「売られた花嫁」は当然のことながら私達のレパートリーにも入っています。ところがヴォルフ＝フェラーリの「マドンナの宝石」は知られてはいるものの演奏されることはない。

今回のレパートリーの中でヨーロッパであまり馴染みのないものといえば、カバレフスキーの「道化師」組曲で、これらは私達の知らないレパートリーです。それから、例えば「ザンバ」序曲、「ルスランとリュ

インタビュー風景



プレイバック中のマエストロ



ドミラ」序曲などは何かの折に放送で聞いたことのある作品ですが、私達のレパートリーにはなっていません。

～(M)：今回のようなレパトリーの録音の方がより時間が掛かると思われましたか？ 例えばブラームスなどの交響曲と比べて。

～(S)：はい。今回のレパトリーは私達にとって異例ともいえるものであるだけに、完璧なまでに仕上げるためには、より長い時間が必要です。例えば精密さと輝きこそが命の「ルスランとリュドミラ」序曲より、あるいはブラームスの交響曲の方がより素直に演奏できる分、仕上げるのも楽かと思えます。

～(M)：大変ありがとうございました。

インタビュー風景



中央はエンジニアのシュミット氏



インタビュー／真鍋圭子

真鍋圭子さんは在ミュンヘン10年以上の音楽ジャーナリスト。カラヤン、サヴァリッシュ、F＝ディースカウをはじめ、世界の著名音楽家と親密なお付き合いがあり、今回のレコーディングも真鍋さんの御尽力により実現可能となりました。

# 聴かせどころを心得たあざやかな棒さばきで、一曲ごとの 味わいを上手に語ってくれる。

——岡 俊雄

ここに録音されたCDは、サヴァリッシュではめずらしいプログラムがずらりとならんでいる。とくに1枚目のロシア管弦楽曲集というのは彼の夥しいレコーディングのなかでもみられなかった曲目ばかりである。2枚目もオーケストラ・ショウ・ピースとしておなじみの知名の曲がずらりとならんでいる。

この2枚のCDに収められた曲目のすべては、それぞれが独立したおもしろさにあふれた名曲ばかりである。料理でいえばア・ラ・カルトのように1品ずつをそのときの気分によってききたい曲だけをえらんでたのしみたい音楽である。LP時代になって、1枚のレコードに多くの曲が雑居していると、好みの曲だけをえらんできくという手数が案外わずらわしく、小品をきくたのしみをわすれてしまうようになった。CD時代にはいって、ききたい曲のトラックを指定すればよいという操作がひじょうに簡単にできるようになったので小品集レコードのもつ本当のよさが息をふきかえすようになったことは喜ばしい限りである。この2枚のCDに収められた曲目は、筆者のように1930年代から50年以上レコードをきいたものにとっては音楽のたのしさを知らされるオーケストラ名曲ばかりがずらりとならんでいる。通してきくもよく、そのときの気分によって、好きな曲だけを好きな順序にプログラミングしてきくのもよく——といった性質のものである。サヴァリッシュ

のようにオーケストラのコントロールにすぐれた能力をもった指揮者が、きかせどころを心得たあざやかな棒さばきで、1曲ごとの味わいを上手に語ってくれる。そこから生まれた小品集のおもしろさは、すぐれた録音によって最上のオーケストラ・サウンドで音楽をきくたのしみを倍増させてくれるのである。

## DISC 1

### ① グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

ミハイル・グリンカ（1803-1857）はロシア近代音楽の祖である。19世紀のロシアの音楽文化は西欧にたいして明らかに後進国であった。旅行好きで青年時代から西欧を訪れたグリンカは、進んだ西欧の音楽技法をロシア民族音楽の土壌に移植し、最初のオペラの傑作「皇帝に捧げし命」（現在は「イワン・ササーニン」と呼ばれている）を発表したのは33才のときで、その6年後の第2作が「ルスランとリュドミラ」で、この2作によりグリンカはオペラ史上に燦たる名前を止める。キエフ大公の姫リュドミラをめぐる3人の求婚者が彼女を得ようときさまざまな冒険の試練を重ねリュドミラの愛人であった騎士ルスランが栄冠を得る波瀾万丈の物語。西欧で早くから序曲だけが広く評判を呼んでいたのはロッシェニエの活力にあふれた音楽が聴き手を魅了したからである。主要主題旋律はオペラの劇中のアリアやモティーフからとられているが終結部に、下降全音階進行

(低音部に)を用いている。50年後にドビュッシーが用いて有名になった技法の先駆的使用としてグリムカの独創をます有名な例になっている。

## ② ポロディン：中央アジアの高原にて

アレキザンドル・ポロディン（1833-1887）は、グリムカの没後、19世紀後半にロシア音楽を確立させた5人組（国民楽派）のひとり。本職は医化科教授の公職の余暇に作曲をし、大作オペラ「イーゴリ公」や交響曲、室内楽などの傑作をのこしている。ポロディンは東洋的なものが大好きであった。1880年アレキザンドル2世在位25周年にあたり、12人のロシアの作曲家が、ロシアを描く主題の作品を書くことになったとき、ポロディンは、近東ロシア領を行進する軍隊の描写を主題にえらんだのがこの曲で、タイトルに「管弦楽的スケッチ」と附記されている。荒涼たる砂漠の情景がヴァイオリンの高音Eの持続からうかびあがってき、ロシア軍に護衛された隊商が遠くから来、また去ってゆく様子が音楽として描かれる。クラリネット独奏のロシア風の歌と、そのあとに出るイングリッシュ・ホルンの東洋的旋律の美しさがとくに印象的である。

## ③ ムソルグスキー：禿山の一夜

国民楽派最大の創造的作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）の1877年の作。彼は早くからゲーテの「ファウスト」のワルブルギスの夜のような奇怪な妖怪の容姿の音画化を意図したスケッチを書



ヘラクレスザール外観

いていた。のちに5人組の仲間からのすすめで「ムラダ」という歌劇にその情景をもちこもうとして果たさず、彼の死後、リムスキー＝コルサコフによってオーケストレーションが完成1886年に初演された。キエフの町のちかくにある禿山（トリグラフ山）にまつわる伝説によったもので、聖ヨハネ祭の夜、地下からさまざまな悪霊が現われ、闇の神への讃美と饗宴をくりひろげるが、夜明けの鐘とともに彼等は退散する。音楽はその物語の完全な標題音楽である。

## ④～⑬ カバレフスキー：組曲「道化師」

ドミトリ・カバレフスキー（1904-1987）はショスタコヴィッチ、ハチャトゥリアンなどとならぶ、ソ連を代表する作曲家。1940年にM.ダニエルの児童劇「発明家と道化師たち」のための劇音楽を書いたが、そのなかの10曲をえらんで演奏会用組曲とした。劇は旅芸人たちが町の広場で公演するさまざまなスケッチからなったコメディ。組曲は、I プロローグ、



IIギャロップ、III行進曲、IVワルツ、Vバントマイム、VI間奏曲、VII叙情的なシーン、VIIIガヴォット、IXスケルツォ、Xエビローグのそれぞれがみじかい、たいへん機智とノスタルジーにあふれたもので、カバレフスキーの代表作となっている。

#### ⑭～⑮ プロコフィエフ：「三つのオレンジへの恋」行進曲とスケルツォ

ショスタコヴィッチとともに20世紀ロシアにおける最大の作曲家セルゲイ・プロコフィエフが1919年に書いたオペラ（初演は1921年シカゴ）から6曲をえらんだ組曲は、彼のオーケストラ曲の代表作のひとつになっている。ここで演奏されているのは、組曲でもとくに有名な第2、3曲である。この頃、プロコフィエフは革命のはじまったロシアから出て日本経由で渡米、1933年にソ連に復帰するまでパリを中心に活躍していた。この頃の彼は20世紀の前衛的スタイルを強烈に打ち出していた時代で、シャープな音の扱いの巧みさでは第一人者であった。

#### ⑯～⑳ リムスキー=コルサコフ：スペイン奇想曲

国民楽派5人組のなかで最年少だったリムスキー=コルサコフ（1844-1908）は海軍士官であったが、29才のとき退役して音楽に専念し、近代管弦楽法の大家として世界的に宣伝された。彼の華麗なオーケストレーションを示したのが1887年作の「スペイン奇想曲」88年作の「シェアラザード」である。「奇想曲」はとくに標題的な意味はなく、全体が5つの部分か

ら成っている。アルボラダ——変奏曲——アルボラダ——シェーナとジブシーの歌——アストゥリアのファンダンゴで、それぞれスペイン的なタッチが、千変万化といってよいほど多彩なオーケストレーションで描き出されている。

## DISC 2

### ① スッペ：「輕騎兵」序曲

フランツ・フォン・スッペ（1819-1895）シュトラウス親子に代表されるウィーン・オペレッタ全盛期に活躍し、約150種の舞台作品を書いた。今日オペレッタとして上演されているものはわずかしかないが、彼の序曲は広く愛好されており、「輕騎兵」はその代表的なもので1866年の作。時のウィーンの人気詩人カール・コスタの作による軍隊生活を舞台にした喜劇。唖々たるファンファーレの導入部が魅力的。途中にハンガリー舞曲のチャルダスが用いられている。

### ② エロール：「ザンバ」序曲

L.J.F.エロール（1791-1833）は、同時代のイタリアのロッシーニに対峙して、フランスのオペラ・コミック作曲家として名声を博した人だが、今日彼の舞台作品は序曲が演奏されているだけ。「ザンバ」は1831年の作で海賊を主人公としたグランド・オペラで大理石像が出てきたりモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」と似ている内容。序曲はオペラの主要旋律がつぎつぎと現われる多彩な変化をもっている

ので今日もひろくきかれています。

### ③ スメタナ：「売られた花嫁」序曲

ベドルジーハ・スメタナ（1824-1884）はチェコスロヴァキアの生んだ最初の創造的な作曲家で、1866年作のオペラ「売られた花嫁」はポヘミアの農民生活を生き生きと描きだした民族的喜歌劇の最初の傑作であった。オフエンバックの影響がつよいといわれているが、序曲の生命感のあふれるばかりの躍動は音楽的にも素晴らしい。

### ④ スッペ：「詩人と農夫」序曲

スッペのオペラとオペレッタ作品は51篇。ほかの舞台音楽を加えれば200作をこえるといわれている。「詩人と農夫」は1846年に上演された第10作だがオペレッタではなく、K.エルマー作のコメディのための劇音楽で、劇中の音楽の主題を序曲に導入したもの。壮重な感じの序奏部から一転して嵐のようなアレグロから爽快な行進曲に転じ、最後は農民舞曲となる。

### ⑤ オッフエンバック：「天国と地獄」序曲

ジャック・オッフエンバック（1819-1880）は、ドイツのケルン生れだが、その名が示すようにフランス系で、パリ音楽院でチェロを学び、20才でオペラ・コミックのオーケストラのメンバー。30、31才でフランス座の指揮者となり、ミュッセの詩につけた歌曲で名をなし、1853年にオペレッタの第一作を発表した。以来、ウィーンのヨハン・シュトラウス2世とともに19世紀後半のオペレッタの黄金時代を築い

た。1858年に上演された「天国と地獄」の大ヒット以来、パリでオペレッタの王様の名声をほしいままとし、最晩年には「ホフマン物語」という幻想的なオペラの大作を書いている。「天国と地獄」という邦題は大正時代浅草オペラ全盛期にこの題で上演されて評判になったのでそれでおおようになっていくが、原名を直訳すれば「地獄のオルフェ」。ギリシャ神話で有名な詩人オルフェが愛妻の死を嘆き黄泉の国から連れ戻しにゆくという話を主題にしているが、



オペレッタ風に奇想天外な扱いがなされている。この序曲をひとときわ有名にしているのはフィナーレのギャロップの部分である。この音楽は19世紀末から

バリ名物のカンカン・ダンスの音楽としてベル・エポックを象徴するほど世界的に有名になってしまった。(日本ではサイレント映画時代の追かけの場面で必ずといってよいくらいに使われて、明治・大正生れの世代の人たちには別な意味でなつかしい音楽にもなっている。)

⑥ ヴォルフ＝フェラーリ：「マドンナの宝石」 間奏曲

エルマンノ・ヴォルフ＝フェラーリ (1876-1948) はヴェニス生れのイタリアの作曲家だがWolfをヴォルフと発音していることが示すように父親がドイツ人である。ヴェニスとミュンヘンを活動の中心としたひじょうな多作家だったが、軽いオペレッタ風の作品を得意としており、ロマンティックな旋律の美しい作品をのこしている。彼の舞台作品では「スザンナの秘密」(1909)と「マドンナの宝石」(聖母の宝石、マドンナの首飾り——としても知られる。1911)がとくに有名。後者はヴォルフ＝フェラーリの唯一の本格的な悲劇的オペラで、恋こがれる女性から聖母像の首飾りの宝石をもってれば結婚するといわれた青年が盗みをおかす。事件が発覚し罪を悔いた青年は自殺するという物語。3幕から成るこのオペラは幕間に2つの間奏曲がはいっており、ともに単独で演奏されることが多いが、第1間奏曲は感傷的な旋律の美しさでとくに愛好者が多い。

⑦ ベルリオーズ：「ファウストのごう罰」ラコッツィ行進曲

フランス・ロマン派音楽の始祖エクトル・ベルリ

オーズがゲーテの名作によった劇的物語(オペラ形式で上演されることもある)の大作「ファウストのごう罰」(1846)のなかでもっとも有名な曲。トランベットのファンファーレからはじまる素晴らしいこの行進曲はもともとハンガリー人が名将ラコッツィを讃える歌からとられたもの。ベルリオーズはこの行進曲をいれたばかりに原作にないハンガリーの場面にファウストを登場させるほどほれこんだ旋律であった。

⑧ シャブリエ：狂詩曲「スペイン」

フランス近代音楽の先覚者の一人エマヌエル・シャブリエ (1841-1894) の1883年の作。フランスの作曲家のスペイン趣味のさががけをなした作。最初はホタ、第2はマラゲーニヤ、どちらも速いテンポの3拍子の舞曲。それからトロンボーンにカブよい第三のモチーフが出る(これはシャブリエの自作。前2曲はスペイン民謡の旋律をとっている)その三つの素材が自由な幻想曲風に展開する華麗な曲。この旋律は「スケターズ・ワルツ」で有名なエミール・ワルトイフェル (1837-1915) のワルツ (1886) にも用いられている。両者ともタイトルは「España」だが、年代からもわかるようにワルトイフェルがシャブリエから借用したものである。

## 理由は謎。しかし、専門家も認める金蒸着の優れた音質。

——岡 俊雄

コンパクト・ディスク（CD）とそのプレイヤーが出現したのは、1982年（昭和57年）10月1日である。それから5年、CDに関する諸技術は目ざましいという一語につけるほど急速な発展をとげた。

このCDは実に驚くべき高精度の細密記録がなされている。12cmという小さな銀色に輝くディスクは一眼つるつるしているように見えるが、電子顕微鏡でなければ見えないほど細かい凹凸がならんでいる。これをピットと呼んでいるが、このピットは幅0.5ミクロン、深さ0.1ミクロン、ピット列の間隔181.6ミクロンしかない。1ミクロンというのは1ミリの1000分の1だから、想像することもむずかしいマイクロの世界である。CDの規格がミクロン・オーダーの厳重な寸法精度を指示されているのはこのためである。こまかいことを書いている余裕はないが、幅0.5ミクロン、深さ0.1ミクロンという、ピット寸法に注目していただきたい。CDは通常このピットのある面にアルミニウム蒸着がされて反射面を形成し、レーザー・ビーム・アップのビームをもとの方向に反射させたり、ピットの山のところでは乱反射させ、0と1の記録を光の有無で検出し、電気信号としてデジタル信号処理系におくり出す。初期のCDには、太陽や強い電光をむけてみると、点となって光が洩れているものがすくなくなかった。これをピンホールと呼んでいるが、眼に見えるほどのピンホールがあるということは、かなりの信号欠落のあることを

意味している。CDのエラー訂正能力はこの程度の欠落は容易にカバーできるし、アルミ蒸着技術がすすんできた最近のディスクでは、ピンホールが見えるというのはよほどひどいプレスの場合である。しかし、ディスクによって音がちがうということがいまでもいわれるのは、蒸着面の厚さと反射率の問題がかかわってもいるらしい。ほかの問題もあるけれどもここではふれない。ピット度が0.1ミクロンということは反射膜がそれ以下、すくなくとも0.02から0.01ミクロンぐらいでなければ、その形状のエッジまでを正確に保つことはできないとおもわれる。アルミよりもっといい素材として金が注目されたのは当然であった。金はアルミよりも粒状性ははるかにこまかくすい被膜でも反射性はよく理想的だと思われたが、蒸着方法に特殊な装置を必要とすること、コストがひじょうにかかるといふ二つの面から見おくられていた。

1986年にあるメーカーが金蒸着CDの試作に成功し、翌年アメリカのマイナー・レーベルが世界最初のコールド反射膜CDを市販した。筆者はそのテスト盤をアルミCDとあわせてきいて、音のちがいにびびくりした。高域がなめらかでおとなしくなり中低音がしっかりして実在感がふえることと、音場のバースペクティブがより見事に再現されたのである。

このとききいた比較サンプルは二種類にすぎなかったが、その後、ほかのレーベルからも限定生産さ

れた10タイトルが出たので、その全部を比較してみたが、個々のディスクではっきりちがうものそうでないものがあったけれど、結論だけいえば金蒸着CDの方が優っているということは、筆者だけでなく、これをきいたほとんどの専門家がいていたことである。

なぜこうなるのかということもCDとデジタル技術の専門家の人たちにあうたびに質問してみたが、明確な返答は得られなかった。アルミと金のCDのエラー・レートはわからない。ただ、レーザービック・アップの出力は金の方が12-15%あがることから反射率のよいということはデータとして確認できたぐらいである。あとは筆者の推測であるが、金蒸着面はアルミより薄い。光にかざしてみればわかるが、金のCDは透過光が緑色に見える。これは、蒸着面がきわめてうすいということを示している。それだけビット型のレプリカで正確になっているのではあるまいか。さらにいえば金はアルミよりQ（共振性）が低いからCDのような500-200回転／分という高速のときでもCDそのものの面ブレの安定度はいいかもしれない。（CDの密度としてはミクロの差であろうが……）デジタル・オーディオではまだ音のちがう要因が解明されている部分よりも不明だという方が多いことはたしかで、金CDの音のよさというのも、われわれにとってはまだ謎である。当事者には部外秘としてわかっている部分もあるのかもしれない

いが。そういう謎があるから、オーディオはおもしろいのであるが。

ヘラクレスザール内部



# 惜しみなく時間を費やし、入念な仕事が成されたといえる。

—— 里見清司

バイエルン放送局との共同制作で、レコーディング企画が実現されたのは今回が本邦初であり、この画期的な仕事は1987年11月、ミュンヘンにて行なわれた。マエストロ・サヴァリッシュ指揮～バイエルン国立歌劇場管弦楽団の演奏で、まさに世界のメジャー・レーベルが手がける内容を我々サイドで具体化したのだ。

数々の打合わせを済ませ録音当日がやってきた。ホールはヘラクレスザール。長方形につくられたホールでコンサート会場としては世界の中規模クラス（1300人程度のキャパシティー）の代表的な存在であり、収録スタジオとしてもバイエルン放送（BR）が常設のコントロール・ルームを置いてあることでも解る通り、数々の名レコーディングを生んでいる。今回の録音スタッフはBRの面々でトーン・マイ



シーメンスオリジナル・コンソールボックス



Studer A-81

スター（プロデューサー）がウィルヘルム・マイスター氏、バランス・エンジニアはハンス・シュミット氏が担当して下さいました。彼らは朝6時半にホール入りし、マイク等のセッティングにとりかかる。ステージに椅子が並べられると日本の様に、マイクスタンドを立てマイクを取り付けるのではなく、天井からマイクケーブルを各々降ろす仕組になっている。ステージ上ではシュミット氏がトランシーバーでマイクケーブルの高さ等の調整をするためりモコンでオペレーターに指示を出す。前後の位置はホール2階手摺りから針金を張って調整する。全部で22本あったが2時間位で一応のポジションが決定、長年の経験で大体の位置は決まっているようだ。

今回の録音はワンポイントマイク方式でなく、メインマイクを中心にしたマルチマイク方式、9時少し前、楽団員が集まり始め9時ジャスト、マエスト

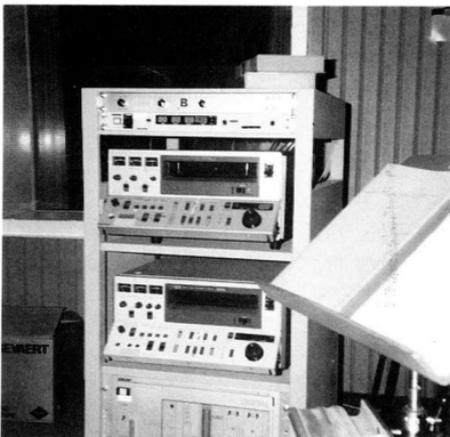
ロ・サヴァリッシュが現われ「詩人と農夫」のリハーサルに入る。暫くホール内でリハーサルを聴く、音がふくよかに湧き出てくるようであった。日本でこのような音は聴いた事がない。ホールトーンは実に透明で素晴らしい。

その後ホール客席後方奥の最上階にあるコントロール・ルームに戻る。まずシュミット氏がメインマイクで全体の響き、音色、バランスを慎重に聴き、各パートに立っているマイクのフェーダーを上げ始めてバランスをとっていった。マイスター氏より木管の音像を少し後にさげるようにとの事で、即座にシュミット氏はデジタル・ディレイにその音と元音

をミックスする方法を用いた。この間、共同制作者としてマイスター氏は我々に、サウンド、楽器のバランスetc. OKなどの最終確認をされたが勿論文句のあろうはずがない。

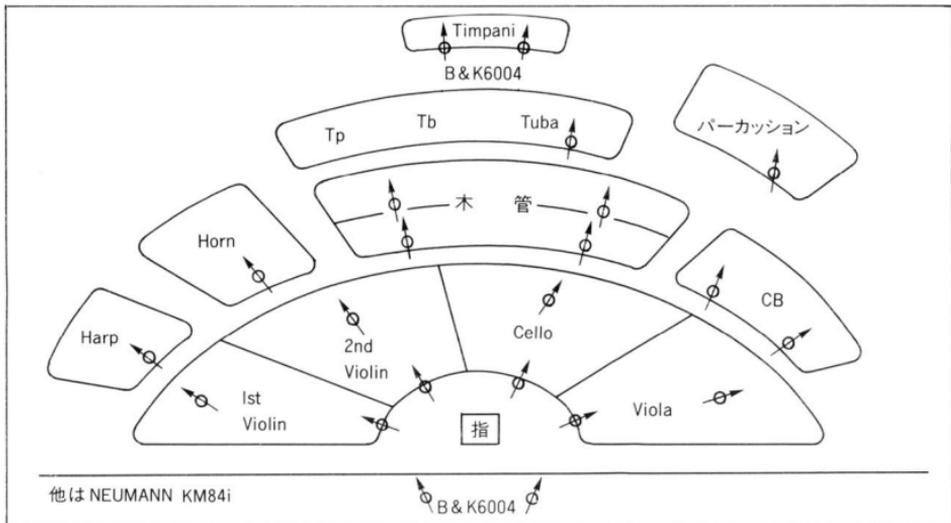
いよいよ本番が始まる。マイスター氏は、マエストロ・サヴァリッシュに信頼されているだけのことはあり、実に的確で細かい指示を出し進行させている。要所で楽器名の伝達を与えるとその通りシュミット氏は各々のフェーダー処理を行っていた。本邦のクラシック録音ではフェーダーはあまり動かさないのが定石ではあるが、録音するにあたり定石にこだわらず関係者の合意のもとであればこの方法も良いのではないだろうか。

以前、私はアメリカで、あるメジャー・レーベルのオーケストラ録音に立ち会う機会に恵まれたのだが、その際短い時間帯の中で、最良の音源を作るといふ、現在世界のクラシック業界における典型例とその厳しさを垣間見た。ところで今回のレコーディングに関しては、演奏者が初めてのレパトリーとは云え、先の録音の約3倍の時間を費やし、入念な仕事が成されたと思う。特にマエストロ・サヴァリッシュのたくいまれなヴァイタリティーと判断力、そしてあらゆる瞬間ごとに、真実の音楽的解釈をと奮闘して下さった成果が如実に表われていた。まさしく、ベストと云える録音が行なわれたのである。



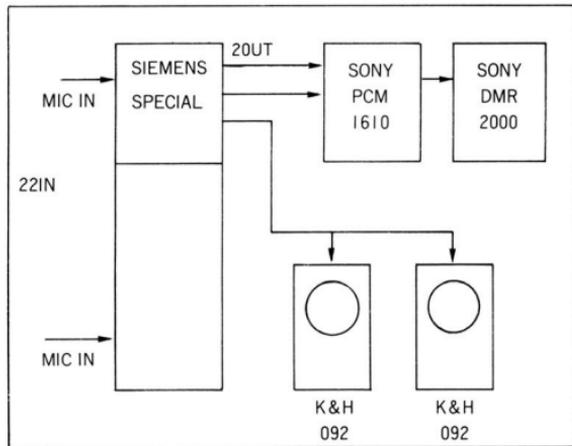
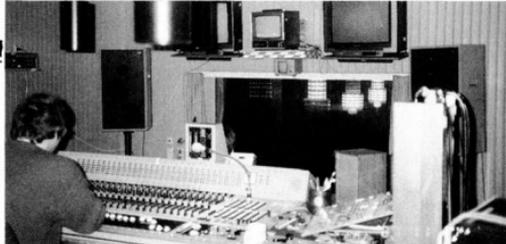
# マイク・セッティング

ヘラクレスザール内部



# 録音ダイアグラム

コントロール・ルーム



## Recording Data

Console: SIEMENS・32INPUT 20UT

Speaker & Amp: K&H・TYPE 092

Digital Master Recorder: SONY・DMR-2000

Digital Audio Processor: SONY・PCM-1610

Mic: B&K・6004

NEUMANN・KM84i

Digital Delay: EMT・445

LEXICON・MODEL 102

## ●スタッフ

総合プロデューサー: フリードリッヒ・ウェルツ (バイエルン放送局)

小山正敏 (東芝EMI)

プロデューサー: ウィルヘルム・マイスター (バイエルン放送局)

里見清司 (東芝EMI)

バランス・エンジニア: ハンス・シュミット (バイエルン放送局)

フォトグラファー: アンネ・キルヒバツハ / 小山正敏

ジャケット: 株式会社グラバー企画

録音年月日: 1987年11月10、11、13、  
23、24、25日

録音場所: ヘラクレスザール、ミュンヘン

制作協力: 株式会社サンデュエット

企画・制作: 第一家庭電器株式会社

**DAMPC**

製造: 東芝EMI株式会社

## 制作にあたって

日頃は、第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。本年11月で、当社は創立30周年を迎えることとなりますが、その記念として、このCDを制作いたしました。

DAMオリジナルソフトは、制作を開始して以来、本年で15年目となりましたが、その間、誰にでも親しまれているオーケストラの小品集をオリジナル録音したいという希望を持ち続けていたところ、この度、世界的な巨匠サヴァリッシュ氏の指揮と、ヨーロッパ最古の歴史を誇る名門バイエルン国立歌劇場管弦楽団という、最高の組み合わせで実現のはこびとなりました。それもDAM初のオリジナル海外録音であり、又、全世界に先がけてVIPメイト会員の皆様だけに提供できますことは、何よりも喜こびでございます。

サヴァリッシュ氏は、NHK交響楽団の名譽指揮者として、TV等を通じて有名な方ですが、日頃のレパートリーは大曲が多く、本CDのような小品を指揮されることは、殆んどありません。それをサヴァリッシュ氏が音楽総監督をされている、バイエルン国立歌劇場の来日公演（今秋）を記念して、我々の希望による名曲集を、心よくレコーディングしていただいたことは、世界の音楽界でも、異例なことと思えます。

その真摯で、品格の高い純音楽的な演奏は、数あるオーケストラ名曲集の中でも、1・2位を争う名盤が完成したと、自負している次第です。

録音もミュンヘンのヘラクレスザールで、ドイツ人スタッフにより、2チャンネルデジタル録音されていますが、スケール感と奥行感のある豊かな音は、ヨーロッパ録音特有のものといえます。

CD化にあたって、今回は30周年記念盤にふさわしく東芝EMI・自社製造による、24金蒸着ディスク（ゴールド・ディスク）にチャレンジいたしました。

なお、本CDの実現にあたり、サヴァリッシュ氏をはじめ、バイエルン国立歌劇場、バイエルン放送局、真鍋圭子さん、そして東芝EMI株、並びに関係各位に多大なご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

最後に、初の海外録音、海外編集ということで、予定より完成が遅れてしまったことを深くおわび申し上げます。

\*5月1日のサントリーホールでのサヴァリッシュ氏とNHK交響楽団とのファミリーコンサートでは、本CDの中からも4曲が演奏される予定です。

# The Jewels of The Madonna

## SAWALLISCH / BAVARIAN STATE ORCHESTRA

### DISC 1

- 1 "RUSSLAN AND LUDMILLA"  
OVERTURE (GLINKA) .....5'19"
- 2 IN THE STEPPES OF.....7'21"  
CENTRAL ASIA (BORODIN)
- 3 A NIGHT ON THE BARE  
MOUNTAIN (MUSSORGSKY).....10'50"  
THE COMEDIANS, OP.26 (KABALEVSKY)
- 4 PROLOGUE.....0'58"
- 5 GALLOP.....1'29"
- 6 MARCH.....1'08"
- 7 WALTZ.....1'12"
- 8 PANTOMIME.....1'41"
- 9 INTERMEZZO.....0'50"
- 10 LITTLE LYRICAL SCENE.....1'15"
- 11 GAVOTTE.....1'34"
- 12 SCHERZO.....1'38"
- 13 EPILOGUE.....1'56"

from "THE LOVE FOR THREE ORANGES"  
OP.33 (PROKOFIEV)

- 14 MARCH.....1'34"
- 15 SCHERZO.....2'24"  
CAPRICCIO ESPAGNOL, OP.34  
(RIMSKY-KORSAKOV)
- 16 I : ALBORADA.....1'14"
- 17 II : VARIAZIONI.....4'27"
- 18 III : ALBORADA.....1'18"
- 19 IV : SCENA E CANTO GITANO.....5'09"
- 20 V : FANDANGO ASTURIANO.....3'23"  
w/Luis Michal (Violin solo) - 16, 18, 19 & 20

### DISC 2

- 1 "LIGHT CAVALRY" OVERTURE  
(SUPPÉ).....6'43"
- 2 "ZAMPA" OVERTURE (HÉROLD)....7'42"
- 3 "THE BARTERED BRIDE" OVERTURE  
(SMETANA).....6'29"
- 4 "POET AND PEASANT" OVERTURE  
(SUPPÉ).....9'21"
- 5 "ORPHEUS IN THE UNDERWORLD"  
OVERTURE (OFFENBACH).....9'24"
- 6 INTERMEZZO from "THE JEWELS OF  
THE MADONNA" (WOLF-FERRARI) - 3'52"
- 7 RAKÓCZY MARCH from  
\*THE DAMNATION OF FAUST\*, OP. 24  
(BERLIOZ).....4'29"
- 8 ESPAÑA (CHABRIER).....6'27"  
W/Peter Woepke (Cello solo) - 4  
W/Luis Michal (Violin solo) - 5



Produced by DAIICHI-KATEIDENKI CO.,LTD.  
Manufactured by TOSHIBA-EMI LTD.

Made in co-production with Bayerischer Rundfunk/Photo by Anne Kirchbach

**DAMP**  
STEREO DOCD-0012-13